

上の句を読んで、下の句を言ってみよう。

1/5



- 1 秋の田のかりほの庵の 苦をあらみ  
○ 2 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の  
○ 3 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の  
○ 4 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の  
○ 5 奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の  
○ 6 かささぎの 渡せる橋に おく霜の  
○ 7 天の原 ふりさけ見れば 春日なる  
○ 8 我が庵は 都の辰巳 しかぞ住む  
○ 9 花の色は 移りにけりない たづらに  
○ 10 これやこの 行くも帰るも 別れては  
○ 11 わたの原 八十島 かけて 漕ぎ出でぬと  
○ 12 天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ  
○ 13 筑波嶺の 峰より 落つる 男女川  
○ 14 陸奥の しのぶも ぢずり 誰ゆゑに  
○ 15 君がため 春の野に出でて 若菜摘む  
○ 16 立ちわかれ いなばの山の 峰に生ふる  
○ 17 ちはやぶる 神代も 聞かず 龍田川  
○ 18 住の江の 岸に 寄る波 よるさへや  
○ 19 難波 瀉 短き 芦の 節の間も  
○ 20 わびぬれば 今 は た 同 じ 難波なる

上の句を読んで、下の句を言ってみよう。

2/5



- 21 今来むといひしばかりに 長月の
- 22 吹くからに 秋の草木のしをるれば
- 23 月見ればちぢに物こそ 悲しけれ
- 24 このたびは 幣もとりあへず 手向山
- 25 名にし負はば 逢坂山のさねかづら
- 26 小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば
- 27 みかの原 わきて流るる いづみ川
- 28 山里は 冬ぞ寂しさ まさりける
- 29 心あてに 折らばや折らむ 初霜の
- 30 有り明けの つれなく見えし 別れより
- 31 朝ぼらけ 有り明けの月と 見るまでに
- 32 山川に 風のかけたる 柵は
- 33 久方の 光のどけき 春の日に
- 34 誰をかも 知る人にせむ 高砂の
- 35 人はいさ 心も知らず ふるさとは
- 36 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを
- 37 白露に 風の吹きしく 秋の野は
- 38 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし
- 39 浅茅生の 小野の篠原 忍れど
- 40 忍れど 色に出でにけり 我が恋は

上の句を読んで、下の句を言ってみよう。

3/5



- 41 恋すてふ 我が名はまだき 立ちにけり
- 42 契りきな かたみに袖を しばりつつ
- 43 逢ひ見ての 後の心に 比ぶれば
- 44 逢ふことの 絶えてしなくは なかなか
- 45 あはれとも いふべき人は 思ほえで
- 46 由良の門を 渡る舟人かちを 絶え
- 47 八重葎 茂れる宿の さびしきに
- 48 風をいたみ 岩打つ波の おのれのみ
- 49 みかき守衛士の たく火の夜は 燃え
- 50 君がため 惜しからざりし 命さへ
- 51 かくとだに えやはいぶきの さしも草
- 52 明けぬれば 暮るるものは 知りながら
- 53 嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は
- 54 忘れじの 行く末までは 難ければ
- 55 滝の音は 絶えて久しく なりぬれど
- 56 あらざらむ この世の外に 思ひ出に
- 57 めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に
- 58 有馬山 猪名の笹原 風吹けば
- 59 やすらはで 寝なましものを さ夜更けて
- 60 大江山 いく野の道の 遠ければ

上の句を読んで、下の句を言ってみよう。

4/5



- 61 いにしへの奈良の都の八重桜
- 62 夜をこめて鳥の空音ははかるとも
- 63 今はただ思ひ絶えなむとばかりを
- 64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに
- 65 恨みわびほさぬ袖だにあるものを
- 66 もろともにあはれと思へ山桜
- 67 春の夜の夢ばかりなる手枕に
- 68 心にもあらで憂き世にながらへば
- 69 嵐吹く三室の山のもみぢ葉は
- 70 さびしさに宿を立ち出でて眺むれば
- 71 夕されば門田の稲葉おとづれて
- 72 音に聞く高師の浜のあだ波は
- 73 高砂の尾の上の桜咲きにけり
- 74 うかりける人を初瀬の山おろしよ
- 75 契りおきしさせもが露を命にて
- 76 わたの原漕ぎ出でて見れば久方の
- 77 瀬を早み岩にせかるる滝川の
- 78 淡路島通ふ千鳥の鳴く声に
- 79 秋風にたなびく雲の絶え間より
- 80 長からむ心も知らず黒髪の

上の句を読んで、下の句を言ってみよう。

5/5



- 81 ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば
- 82 思ひわび さても命は あるものを
- 83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る
- 84 ながらへば またこの頃や 忍ばれむ
- 85 夜もすがら 物思ふ頃は 明けやらで
- 86 嘆けとて 月やは物を 思はする
- 87 村雨の 露もまだ 干ぬ 檜の葉に
- 88 難波江の 芦のかりねの ひとよゆゑ
- 89 玉の緒よ 絶えなば 絶えね ながらへば
- 90 見せばやな 雄島の 海人の 袖だにも
- 91 きりぎりす 鳴くや 霜夜の さむしるに
- 92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の
- 93 世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ
- 94 み吉野の 山の秋風 さ夜更けて
- 95 おほけなく うき世の 民に 覆ふかな
- 96 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで
- 97 来ぬ人を 松帆の 浦の 夕風に
- 98 風そよぐ ならの小川の 夕暮れは
- 99 人も惜し 人も恨めし あぢきなく
- 100 ももしきや 古き軒端の しのぶにも